

經濟論叢

第110卷 第3・4号

大正期における地方自治変貌の一視点……………島	恭彦	1
河上肇における経済と人生……………杉	原四郎	17
河上肇と社会科学の方法……………山	之内靖	34
「辺境地」をめぐるソヴェト史学の最近の討論…保	坂哲郎	60
予算制度改革論の一原型としての GMの基準価格制の形成と管理機構……………小	野秀生	80
河上肇先生遺品展および記念講演会記事……………		103

昭和47年9・10月

京都大学経済学会

河上肇における経済と人生

杉 原 四 郎

I

河上肇の著書に『経済と人生』と題する文集がある。明治44年、つまり河上が32歳のときに刊行したもので、1編をのぞけばすべて彼が明治41年に京都に移ってから後諸雑誌に発表した論文や随想があつめられている。第1編「分労と共楽」、第2編「経済上の理想社会」、第3編「閉戸閑筆」、第4編「政体と国体」、第5編「日本独特の国家主義」という編別構成からもうかがえるように、河上の論説は経済のみならず人間生活の諸領域におよんでおり、『経済と人生』という表題はその幅広い内容にふさわしい。

経済学徒としての河上の関心がその出発点から単なる経済問題にとどまらない広汎なパースペクティブをもっていたことは、明治44年までの彼の著作活動を見てもわかる。すなわち彼は、一方では東大の大学院生のときに出版した処女作『経済学上之根本観念』（明治38年）以来、『経済学原論』上巻（同年）、『日本尊農論』（同年）、『日本農政学』（明治39年）の公刊という風に、経済学の原理と応用の研究に精進し、とくに京大に赴任してからは、ピールソンの『価値論』（明治44年）やフェッターの『物財の価値』（同年）や解説を出版して、最新の経済学説の摂取につとめているのだったが、それと同時に、他方で彼は、「社会は何に依りて動くか、偉人の史上に於ける価値如何、道徳の発達は経済と如何なる関係を有するや。是等の問題……の解釈を試み、以て一種の史観、人生観、社会観を述べた」（訳者例言）セリグマンの『歴史の経済的解釈』を訳述した『新史観』（明治38年）を出したり、元来「経済上の一主義（ではあるが）……然も其関連する所、政治、宗教、倫理、道徳其他社会各般の事項に及

ぶ』社会主義(著者例言)を論じた『社会主義評論』(明治39年)を出したり、あるいはまた、買いあつめた経済学の書物も全部処分して無我苑にとび込んだときの心境をまとめた『人生の帰趣』(同年)やトルストイの日記・草稿のたぐいを訳述した『人生の意義』(同年)を世に問うて、広く人生の各般にわたる諸問題を論じているが、彼は京都にうつってから『人類原始ノ生活』(明治42年)とか『時勢之変』(明治44年)とかいった狭義の経済学の範囲をこえた著作の刊行をつづけているのである。

このような著作活動にあらわれている河上の問題意識の特色は、人生における経済の比重と役割を、社会生活の他の諸領域との関連において、あるいは人間の歴史的発展の経過のなかで追究してゆくとともに、さらにそもそも人間にとって経済活動がどういう意義をもっているかということ、人間の生き方とかかわらしめて問いかけてゆくところにある、と思われる。『経済と人生』という上掲の論文集の題名は、このような河上の特徴的な問題意識を端的にしめているといつてよいが、明治44年までの著作を通じてみられる彼のこうした問題意識は、大正期以降に稀薄になっていったわけでは決してなく、その後の思想的遍歴を通じて一貫して持ちつづけられたものであった。大正および昭和期における河上の著作、活動の跡をたどつてゆくと、『経済学研究』(大正元年)、『経済原論』(同2年)、『貧乏物語』(同6年)、『近世経済思想史論』(同9年)、『資本主義経済学史的発展』(同12年)、『経済学大綱』(昭和3年)、『資本論入門』(同7年)といった経済学上の系列に属するものと、ファイトの抄訳『唯心的個人主義』(大正2年)、『祖国を顧みて』(同4年)、フィッシャー・フィスクのまとめた小冊子の訳本『如何に生活すべきか』(同6年)、『社会問題管見』(同7年)、『唯物史観研究』(同10年)、『人口問題批判』(昭和2年)などのいわば人生論的系列に属するものとの二種の著作がまじり合いながら公刊されているのに気づかされる。だがこのことは河上の問題意識が二つに分裂し、それぞれが別々の系列の著作となってあらわれてくるということを意味するものではない。上述の河上特有の人生論的経済観が、彼のすべての著作活動の根底に

横たわっていることが重要なのである。本稿はこうした観点から、河上の若干の著作をとりあげ、彼の業績がかもし出す独特の風格と魅力の源泉をさぐるとともに、河上の思想的学問的成長過程の中でこの基本的問題意識もまたどのように推移していったかを、考えて見ようとするものである。

II

『経済と人生』第1編「分労と共楽」は、「労苦は成る可く多数の人に分割して之を負担することゝ為し、快樂は之に反し出来るだけ多数の人が共同して之を享受することゝ為すは、人類社会進化の一法則」であることを明らかにせんとするものであって、河上はまずアダム・スミスの留針生産の例をひきながら、分業による生産力の発展と社会の進歩との相関関係を説き、ついで「彼の職工の如き、其の負担する労力の範囲は極めて微小なれども、其の消費する物資は極めて多量多種多端なり」として、「『分労』行はるゝに連れて『共楽』の範囲も亦次第に拡張されつゝある」所以をのべる。そして現代の労働者が「余りに多くの時間を僅少の報酬のために労働しつゝあるが故に、余の所謂『共楽』を完うするに於いて時間と資金と共に乏し」い点、つまり「分労」の発達に比して「共楽」の「発展の稍々後れ居る」ところに「現代文明の欠陥」がある点を指摘するのだが、しかし基本的には「『分労』の進歩に伴ひ『共楽』の余地は益々拡張せらる。即ち労働時間の如きも将来益々短縮せられ、人生は『文明生産』の為に費さるゝこと益々少うして『文明消費』のため其の大部分を献げ得らるゝに至らん」と結論する¹⁾のである。また第2編「経済上の理想社会」は、「経済社会の理想は人をして経済行為にふ労働の苦を忍ばしむること無うして、只だ偏に消費行為にふ充欲の快を享けしむるに在る」ことを論ずるもので、その理想を実現する方策として河上があげるのは、労働時間の短縮と労働の種類の選択との二つの方法による労働の遊戯化である。河上はすすんで労働時間短縮の方途をたずね、生産の技術・組織の改善および労働の分担

1) 『経済と人生』1-46ページ参照。

の二つをあげるが、「人生に必要とする労働の分量を出来得る限り軽減するの策」としては、生産力の発展がヨリ根本的な方策であるとし、今や「眼前の事象は歩一歩絶えず【理想の】彼岸に向かって進みつゝあるを見る」という。また労働の種類を多くして各人にその欲する所を随意にえらぶ自由をあたえることによる労働の遊戯化も、分業の発展にともなう職業の増加、職業自由の法制化、交通機関の進歩というそのための諸条件が今やととのいつつあるのであって、「之を要するに労働の遊戯化てふ吾等の理想は、一方に於て労働の分配及び生産の技術、組織の改善あり、他方に於て職業の種類増加と撰択の自由の増進とあり、両に相待って益々其の実現を急ぎつゝある」と、第1編とほぼ同様の明るい展望を以てむすんでいる²⁾のである。

上に要約した河上の論旨から、われわれはいくつかの特徴をひき出すことができるであろう。第1に、分業=生産と共業=消費との両面から経済の構造をとらえ、その発展を人類進化の法則としておさえるという視点から、経済と人生との関連を広いパースペクティブのもとで考察しようとする点が重要である。第2にその場合河上の思考の軸になっているのが生産力の発展→労働時間の短縮→生活の多面的向上という因果関係であって、この点もまたその後の河上によってもちつづけられた基礎視角であった³⁾。第3に注目されるのは、近代、とくに産業革命による生産力の発展を基礎とする社会の動向に河上が明るい期待をよせ、「経済社会の大勢は次第々々に吾人の理想を実現せんとする傾向を明示しつゝあり」⁴⁾とのべていることである。上に紹介したように、たしかに河

2) 同上、87-108ページ参照。

3) 河上は『経済論叢』の大正8年3月号に「日満農家の生活比較」という一文をのせているが、彼はそこで「貨幣所得又は……所謂実質所得を標準として人の生活程度を測定する」と云う事は大体に於ては差支ないが、場合に依つては基だ不正確なる結果を齎すものである」として、個人の生活状態を比較するに当って貨幣所得の外に計算に入れなければならないもの5点をあげている。第1にあげられているのは物価または品質の変動及び相違であるが、これを考慮に入れることは名目所得でなく実質所得の比較ということになるから省くことにすると、他の4点のトップに河上があげているのが「職業以外に於ける閑暇の多少である。同一金額の貨幣所得を得つつあるも之を得るが為に犠牲とする時間の多少に依りて人々の生活状態は相違すべき筈である」(『経済論叢』第8巻第3号、139ページ)。河上が経済の問題を生活全般と関連させて考える場合の通路が「閑暇」の時間であることが、ここにもしめされている。

4) 『経済と人生』102ページ。

上は、現在の労働者の生活が生産力のめざましい発展の恩沢を十分にうけてはいない点に問題があることを指摘してはいるものの、彼の論旨の主眼は、そうした問題があるにもかかわらず大勢としては人類進化の法則が貫かれ、人類は理想社会への道を着々とすすみつつあるという点におかれているのである。ところでこのような河上の思想の特色は、彼がマルクスの研究に本格的に入ってゆくに際して、どのような意味をもつであろうか第1点は経済の構造的かつ動態的の把握という点で唯物史観の考え方と親近性をしめしているが、明治末期の河上はすでに経済史観乃至生産力史観という側面での唯物史観にふれ、その側面に関するかぎり自己の思想に摂取していた⁵⁾。第2点の労働時間論は、その底に横たわっている労働観がスミスや J. S. ミルやジェボンズなどに共通する労働苦痛説乃至労働犠牲説をうけ入れているという点では、マルクスと対立するものがある⁶⁾ とはいえ、同時に労働が人間にとっての本源的費用であり、節約されるべきコストでもあることを強調する点ではマルクスの経済本質論と相通ずる考え方であっ⁷⁾ て、河上自身はマルクス研究をすすめる中でこのことを強く自覚したことであろう。しかし第3点はマルクスの資本主義批判と最も鋭く対立するものであって、河上が賃労働者の労働疎外の実態を深刻にうけとめ、その体制的根因に思いをいたさないかぎり、マルクスとくに『資本論』への内在的理解は困難であろう。だがこの点について河上は大正の半ばごろまでに可成りの前進をとげたように思われる。

河上が『資本論』と本格的にとり組むようになるのは、おそらく彼が『社会

5) 河上は『経済と人生』の前著『時勢之変』（明治44年）の中で『経済学批判』序説にある唯物史観の公式を引用し（その冒頭の文章は「人類は其の生活の社会的な生活〔産の誤植であろう〕に依って……」と訳されている）、これにつぎのようなコメントを加えていた。「即ちマルクスの意は、凡て社会人事の変遷の根本原因は経済上に於ける生産方法の変化に在りと云ふにて、所謂唯物史観、詳しく言へば経済的唯物史観と云うもの即ち是れ也。思うに鋭敏なる読者は、現に此の『時勢之変』の著者それ自身が既に此の如きの史観に傾けるに心付かられたるなるべし」（148ページ）。

6) 杉原「河上肇博士の労働観」（杉原『西欧経済学と近代日本』昭和47年、203-219ページ）参照。

7) 杉原「労働節約法則と『資本論』——価値人類犠牲説の再検討——」（同上、220-237ページ）参照。

『社会問題研究』を創刊した大正8年以降ではなかろうか⁸⁾。『自叙伝』によれば、元来河上が最も興味を持っていた経済原論は、京都大学では先任者の田島錦治が担当していたので、河上が大正4年に教授に昇進したときも担当講座は経済学史であったが、大正5年度からやっと経済原論の一部である分配論を担当することができ、「それから後、何年か経って」漸く、田島と交替で隔年に経済原論を講義しうるに至り、やっと「講義と研究との一致をかちとることが出来た。私が熱心に『資本論』にかじりつくことができるようになったのは、恐らくそのお蔭であったであろう」⁹⁾。大正9年の『経済論叢』にのった『『資本論』に見られたる唯物史観』と「三種の『資本論』邦訳」とは、河上の『資本論』研究がその緒についたことをしめす文献であるが、その頃の河上がさきに指摘した労働時間論についてどのような問題意識をもっていたかをうかがう上で興味ふかい一文がのこされている。『社会問題研究』第10冊(大正8年11月)に掲載された「断片」の第5篇がそれである。

この一節¹⁰⁾はつぎのような文章ではじまる。「労働時間制限の問題が、現代社会の文化問題として、重要な意義を有する所以の一は、所謂賃傭労働者の労働が、マルクスの言へる如く、sein Leben selbst(彼の生命又は生活それ自身)と為り得ずして、ein Opfer seines Lebens(彼の生命又は生活の一犠牲)たるが為である。其意味に於て、或種の精神労働は、全く労働時間制限問題の範囲外に属する」。河上はついでスマートの著書の一節を引用して、教員という職業に典型的に見られる精神的労働では所謂労働時間の制限など「全く問題外のことであり」とのべ、つぎのように書いている。

8) 河上が『資本論』について書いた最初の文章「マルクスの資本論」——これは『資本論』第1巻刊行50年を記念して大正6年9月～10月に大阪朝日新聞に連載され、『社会問題管見』に収録された——は、マルクスの生涯と人物とをミスと比較しつつのべたもので、『資本論』の内容にはほとんどふれていない。

9) 『自叙伝』の「自画像」の7「鈍根の私」の一節。『自叙伝』I、昭和22年、178-179ページ。

10) 『社会問題研究』第8冊、8-12ページ。この中でてくるマルクスの言葉は「賃労働と資本」の中にある。Marx, Engels, Werke, 6, 1959, S. 400. なおこの「断片」の全体は松方三郎が編集した『西洋と日本他』(『朝日文庫』17、昭和26年)に収録され(178-188ページ)、その際「断片(三)」として5節のそれぞれに標題がつけられた。第5節のそれは「労働時間の制限」である。

「悲い哉、今日の産業社会における筋肉労働の殆ど全部並に精神労働の少からざる部分は、労働者その人にとって、賃金又は給料を得る為の単なる手段に外ならぬのである。故にそは、マルクスの言へるが如く、彼等の生命そのものと為り得ずして、実に彼等の生命の犠牲である。若し彼等が人間としての真の生活を実現せんと欲するならば、そは総て、彼等が労働を終へたる後、剩せる所の時間内に於て之を企つるの外は無い。是れ所謂労働時間短縮の問題が、一の文化問題として今日重要な意義を有する所以である。……〔労働時間短縮に対する〕賃傭労働者の要求を是非するに当つては、吾々は、彼等の従事しつつある労働の性質に就き、常に十分なる考慮を為すの必要がある」¹¹⁾。

河上はここで賃金労働者の労働の特殊歴史的な性格を問題にしており、彼等の労働時間短縮の要求が前節で紹介した「経済上の理想社会」でのべられていたような歴史を貫通する人間の要求とはことなる性質をもっていることを指摘しているのであって、われわれはこの点に、明治末期の河上とくらべて大きな発展を見いだすことができるのである¹²⁾。

III

ところで明治末期から大正中期にいたる間での河上のこうした変化を考えるうえで注目すべき作品の一つに「婦人問題雑話」がある。これは河上が『貧乏物語』を大阪朝日新聞に連載するほぼ一年まえ、つまり大正4年の秋に同じ大阪朝日に連載したもので、その後加筆のうえ『社会問題管見』(大正7年)におさめられて普及した。ところが、大正9年に出た『社会問題管見』の改版本ではけずられてしまったので、それ以来あまり人目につかなくなってしまう、戦後も『河上肇著作集』の第10巻に収録されるまでは複製される機会がなく、『貧乏物語』のかげにかくれてしまった観がある。たしかに『貧乏物語』が53回の

11) 『社会問題研究』第8冊、11-12ページ。

12) この点は『社会問題研究』の第23および24号(大正10年6月・8月)にのった「労働の苦痛に関する一考察」においてより詳しく論ぜられている。ちなみにこの論文は「労働の苦痛と社会組織」と改題して『社会組織と社会革命』(大正12年)に収録された(280-322ページ)。

連載で完結したのに対して『婦人問題雑話』は18回でうち切れ¹³⁾、「述べ来りし所は問題中十の一二であって、奮に其経済的方面に於ける諸問題を尽さざるのみならず、倫理問題、政治問題等には未だ全く触るゝ及ば」¹⁴⁾ずに終わったという点で、河上にとっては不本意の作品であったろう。だが彼がこの「雑話」を「現在に於て主として経済上の事情に基く大問題が二つある。一は貧富の問題で、一は男女の問題である」という文章で書きはじめてるように、本来この『婦人問題雑話』は『貧乏物語』と姉妹編をなすべきものとされていたのであり、現代の経済問題を取りあげる『貧乏物語』には見られないものがそこにあるという点でも、この『雑話』はわれわれの興味をそそる作品である。

河上肇が婦人問題を取りあげたのはこれが最初ではない。『時勢之変』（明治44年）の中ですでに彼は、分業の発達にともなう経済組織の変動、すなわち自給経済から営利経済への転換にともなう起ってくる重要な社会現象の一つとして、家族の内部における婦人の経済的役割が無用化したことをあげ、それによって「上流社会の婦人が社交場裏に入ると同時に、下流社会の婦人は則ち工作場裏に入り、此の如くにして彼等は始めて独立の所得を有するに至りたり。……是に於てか外は社会に内は家庭に現代特種の婦人問題は起り来れり」¹⁵⁾とのべていた。『婦人問題雑話』においてもまた河上は、家庭を出て社会で働く婦人が激増した原因を機械の発達にもとづく自足経済の崩壊にもとめ、「要するに今日は、家庭内に於いて不用となりし女の手が、次第に其必要の度を加へつつある貨幣を掴まんが為に、家庭外に延ばされつつ時代である」¹⁶⁾と語っており、そのかぎり『時勢之変』と同じ論法である。だが『婦人問題雑話』の河上はそれより一歩すすんで、社会で働く婦人の経済的地位は如何なるものか

13) 河上はこれを『社会問題管見』におさめるにあたってそのはじめにつきのように注記している。「本篇は、大正4年10月11日より『大阪朝日新聞』に掲載し始め、同月末日、今上天皇陛下御即位の御大典近づき、新聞紙の記事輪漙するに及び、途中にて筆を擱きしものである。『社会問題管見』339ページ。

14) 同上、451ページ。

15) 『時勢之変』110-111ページ。

16) 『社会問題管見』387ページ。

を問う。そしてまず欧米各国の統計を示して「今や多数の女子は、其男子の世界に出て、平均すれば男子以下の待遇をうけつつあるのである。それが新しき女である。新しき女の多数は、是等最も憐むべき労働者の群である」¹⁷⁾ことをあきらかにし、ついで日木の女子労働者の問題をとりあげる。河上はそこで最近わが国の死亡率が欧米諸国とは逆にむしろ年々増加する傾向にある事実をあげ、それは幼少年と青年の死亡率が増大しているからであるが、青年の場合主たる原因は結核にあることを指摘し、その結核が繊維工場で製造され、そこではたらく女工によって伝播されていることを、国家医学会例会で発表された石原修の研究¹⁸⁾に拠りつつ説明する。工場での長時間労働や夜間労働でまた女工の寄宿舎の非衛生的な状態で女工の健康がむしばまれるのみならず、彼女らが病気をもって帰郷するために農村という「国家の礎、都会の根」もまた病菌におかされている実態を説いて河上は、明治44年に発布された工場法が「経費予算なきを以て」未だに実施されていないことを突き、「かくの如くにして恐るべき殺人未遂は、到る所の工場に於て、公々然法律の保護の下に行はる」¹⁹⁾と批判する。そして河上は、こうした女工の惨状のみならず、労働者を母とする胎児や乳児の死亡率にも読者の注意を喚起して、つぎのように訴えるのである。

「元来吾々が家族なるものを形成している本来の趣旨は、子孫の保護養育を完うするに在るが、而も現代の文明は母を家庭より奪ひ、乳を赤児より奪うて、次第に吾等の家庭を破壊しつつある。物資の生産は非常な進歩をしたと云ふけれども、多数の者は得て其恵に与らず、かくて男子一人終日の労働以て妻子を養ふに足らざる以上、妻も亦家庭を出で乳児を棄てて、工場裡の労働に従事す

17) 同上、393ページ。

18) 石原修(1885—1947)は農商務省が明治43年に実施した工場衛生調査の担当者の1人であった。この調査は工場の内側だけでなく農村についてもあわせておこなったところに劃期的な意義があるのだが、その結果を石原が大正2年10月国家医学会例会で講演したのが「女工と結核」で、これは翌大正3年1月に国家医学会から石原の同種のテーマに関する論文とともに、小冊子『衛生学上ヨリ見タル女子之現況』として公刊された。河上はおそらくこの小冊子を見たのであろう。この小冊子は光生館の『生活古典叢書』の第5巻『女工と結核』(昭和45年)に複製されている。なお石原修の名は『資本論入門』(昭和7年)の中にも見える(573ページ)。

19) 『社会問題管見』第11節「機械という食人鬼」以下の3節(400-420ページ)を参照。

るの外は無い。そこに『文明の悲劇』がある。社会組織の根本に意を潜めなければ、到底解決するを得ざる最大の難問があるのである²⁰⁾。

このような鋭い現実認識や体制批判は、明治末期の『時勢之變』にはもとよりなかったし、『貧乏物語』においてさえ、これほど力強い日本資本主義に対する告発は見だし難い。後年河上は『資本論入門』（昭和7年）でマルクスの労働力の売買や絶対的ならびに相対的剰余価値の生産についての叙述を説明するに際し、細井和喜蔵の『女工哀史』（大正14年）などをつかひながらわが国の婦人労働者の状態を描写している²¹⁾が、「婦人問題雑話」での上述の説明は、基本的に『資本論入門』のそれにつながるものがあるといってよいだろう。大正8年の河上の労働論が、明治30年代の問題意識を一方では継承しながらも、他方ではそれから大きく前進している背景には、資本主義社会における労働疎外の実態と構造とを河上がこのようにはっきりと把握するにいたったという事情があるのであり、その意味でこの「婦人問題雑話」は、河上の思想的成長過程の一道標として重視されるべきものである。しかもそのテーマが男子でなく婦人の労働者であることから、工場と家庭、都市と農村、出産と育児などといった人間生活の諸領域を広く視野におさめつつ経済問題が追求されており、その点で河上の特色が十分に発揮されている作品の一つといってよいだろう。

河上のこうした婦人論との関連で想起されるのは、『経済学批判』緒言にある唯物史観の公式の冒頭の文章に二種の生産がふくまれているかどうかという問題である。河上は明治43年ウォルトマン(L. Woltmann)の『唯物史観』(Der historische Materialismus, 1900)の一節を抄訳して『国家学会雑誌』にのせた(後に『経済学研究』に収録)が、その中でウォルトマンはエンゲルスがマルクスとモルガンとを総合し、歴史の物質的基礎として経済的技術的生産力の他に「人の複生産てふ有機的生理的の生産力も之に加へ」たことを高く評価した²²⁾。河上自身は大正8年における公式の冒頭文章の邦訳では「人類は彼等の生活の社

20) 同上, 443-444ページ。

21) 『資本論入門』490-491, 569-571, 577, 580-581, 706, 711, 723, 739-741ページ。

22) 『経済学研究』465-466ページ。

会的生産に於て」とし、「生活の社会的生産」とは「人類が其生活に必要なる物資を社会的に生産すること」と注記しており²³⁾、また同年の『経済論叢』に発表した論文「マルクスの唯物史観に所謂生産の意義」（加筆の上『唯物史観研究』大正10年に収録）において、エンゲルスのように歴史の決定的要素として二種の生産を考えるとマルクスの唯物史観の特色たる一元的性質が全く破壊されてしまうと批判した²⁴⁾。ところが昭和2年8月の『社会問題研究』第82冊にのっている「唯物史観に関する自己清算」（その6）の中で河上は、唯物史観の出発点を生活資料の生産、人口の増加および欲望の増進の三契機とすべきであると主張するにいたり、『家族・私有財産・国家の起源』において「エンゲルスのいふ die Produktion und Reproduktion des wirklichen Lebens（現実的な生の生産および再生産）、または『ドイツ・イデオロギー』にいふところの die Produktion des Lebens, sowohl des eignen in der Arbeit wie des fremden in der Zeugung（労働においては自己の、生殖においては他人の、生の生産）、或は『経済学批判』の序言における謂ゆる唯物史観の公式の冒頭における『人間の生（レーベン）の社会的生産』」を同義に解釈し、マルクスとエンゲルスとの統一的理解をはかっている²⁵⁾。見られるようにそこでは *Leben* が「生活」ではなく「生」と訳される²⁶⁾ ことによって、三種の生産を包含させようとしているのである。若き日に上掲のウォルトマンの見解をわが国に紹介した河上が、また『婦人問題雑話』で婦人問題を貧困の問題とならぶ現代社会の二大問題として提起し、幼児や青少年の死亡率の増加に深い憂慮をしめした河上が、唯物史観のこうした解釈にたどりついたことは興味ふかいものがある。そしてヨリ根本的には、経済の問題を人間の生活全体のなかでつかまえようとする河上の思想的特質がこのようなレーベンの解釈²⁷⁾ を生み出すにいたったと考えるべき

23) 『社会問題研究』第3冊、大正8年3月、20、22ページ。

24) 『唯物史観研究』53-54ページ。

25) 『社会問題研究』第82冊、1-18ページ。ほぼ同様の説明が、『マルクス主義経済学の基礎理論』（昭和4年）のなか（上篇第3章「史的唯物論（唯物史観）」の第二節）でもなされている。

26) ただし河上肇・宮川実共訳『政治経済学批判』（昭和6年）ではふたたび「生活」にもどっている。同書71ページ。

ではないであろうか。

IV

最後に私は河上肇の『資本論』研究の総決算として書かれた『資本論入門』をとりあげ、その中に上束のべきたった河上の思想的特色がどのようにあらわれているかを考えて見たいと思う。『資本論入門』にとってはさまざまな評価がある。すなわち一方では、大内兵衛のように、河上が『資本論入門』にもちこんでいる唯物弁証法はギョチなく、また die politische Ökonomie をわざわざ政治経済学と翻訳しているところなどにあらわれているような政治主義的偏向やマルクスの説明の例解に現代日本の実情を無造作に用いるような方法論的弱点などから見て、本書を「力作ではあるが傑作ではな(く)……彼としては失敗の作と見る」²⁸⁾ きびしい評価があり、他方では長谷部文雄のように、本書が戦後のわが国の研究者によって「不当に冷遇されている」にもかかわらず、「その底にある強烈的階級的ヒューマニズム」が本書に独特の生命をあたえており、理論的にもローゼンベルグの『資本論註解』とくらべて優るとも劣らぬ内容をそなえているとする²⁹⁾ 高い評価がある。また降旗節雄は、河上の政治主義的偏向を難ずる点では大内に同調しながらも、弁証法的方法についての河上の執拗な関心はこれを積極的に評価し、とくに「価値形態論の究明を通して『資本論』の弁証法的論理を具体的に追求した最初の労作」³⁰⁾ という点を高く

27) 唯物史観における二種の生産をめぐるわが国の学界の研究動向については、杉原「エンゲルスの統一的全像を求めて」『思想』昭和45年11、12月号を参照。戦後二種の生産問題を提起した三浦つとむ（「スターリンの見解と私の見解とはどこがちがうか」『民科研究ニュース』昭和25年10月）や神山茂夫（『解説・日本革命』昭和31年）や大熊信行（「マルクスにおける一つの訳語問題——生命の生産か生活の生産か——」時事通信・時事解説版、昭和31年8月13日）などによって、河上肇の『唯物史観研究』における「生活の社会的生産」とする見解が批判的に検討されたが、本稿で紹介した『社会問題研究』第82冊の「自己清算」における河上の見解は、論者によってあまり問題にされていないように思われる。

28) 大内兵衛「経済学者としての河上肇」、末川博編『河上肇研究』昭和40年、154-155ページ。

29) 長谷部文雄「『資本論入門』解説」『河上肇著作集』第5巻、昭和40年、471-481ページ。

30) 降旗節雄「河上肇」日高晋他『日本のマルクス経済学』上、昭和42年、253ページ。降旗のこうした河上評価には、宇野弘蔵が昭和5年6月『社会科学』に発表した論文「貨幣の必然性」を書くうえで河上の価値形態論研究から刺激をうけた（宇野が当時読んだのは昭和4年に出た河上の『資本論入門』第1分冊上冊である）ということが念頭にある。この点については宇野弘蔵『資本論50年』上、昭和45年、214、305ページを参照。

評価している。こうした見解は『資本論入門』の特質をそれぞれの角度から照し出したものとして興味ふかいが、私が本書の特色として最も強く印象づけられるのはつぎの二点である。

第1は、河上の青年時代からの持論である人間にとっての労働時間の問題の重要性が、本書においても強調されていることである。『資本論』第1部で労働時間の大きさが主として問題とされるのは、絶対的剰余価値論における「労働日」の章、相対的剰余価値論における「機械経営が労働者に及ぼせる直接の諸結果」の節、それに第5篇第15章「労働力の価格と剰余価値との大きさの変動」のなかの労働日の変動をとりあつかう第3節および第4節などであろう。河上はこうした箇所の説明にとくに力を入れているが、とりわけ印象的なのは、第13章「機械および大工業」のなかで「労働の強度化」を論ずるに際し、つぎのようにのべていることである。

「今日までにおける人類の総実践が吾々に示すところは、(1)一般的に労働の強度は吾々が予期しているよりもより高度に高められうるものということ、(2)労働時間の短縮より生ずる生産物の生産減少は、多くの場合、短縮された労働時間内における労働の強度の増進に基づく生産増加によって補償されて余りがあるということ、(3)もし社会のすべての成員が労働を負担するようになれば、労働の強度化につれて行われうる労働時間の短縮は、殆んど限りなきものがあるということ、等々である。以下吾々は、マルクスが『資本論』において述べていることに対しその後における若干の経験を補充しつつ、以上の諸事実を証明するであろう」³¹⁾。

河上はそれについて「帝国主義の現段階における資本家的搾取の主要日標」としての産業合理化とそれに基づく労働強化の実態をくわしく説明し「すべてはマルクスの示した資本の一般的傾向と完全に一致する。ただそれらの傾向が、正にマルクスの示した線に沿って、今では想像しえられるかぎりの極度にまで展開されて来たということ、このことが、もし『資本論』の叙述に何等か補充

31) 『資本論入門』719ページ。

すべき点があるとするならば、「即ちそれであろう」³²⁾ とのべるとともに、それと対比して、現在の世界ではもう一つの合理化がおこなわれているということ、つまり「世界の六分の一を占めているソヴェート聯邦では、社会主義的合理化が行われ、従って賃銀の増加、労働時間の急速なる短縮、失業者の減少……等々が行はれてお」³³⁾ ることを強調する。そして「5ヶ年計画なるものが着々実行されつつある」ソ連において、「労働の強度と生産力とが増加し、同時に労働日が短縮される場合」というマルクスが第5篇第15章第4節の(2)であげている三要素の変化の組合せが現におこりつつあることを力説する³⁴⁾。私は河上がそこで『資本論』第15章の末尾の「広く知られている」章句³⁵⁾を「労働が社会の成員のすべてによって分担される将来の展望」という見出しをつけて引用するとともに、「私は序に第3巻の終りにある次の章句を茲に引用しておこう」とのべて、『資本論』第3部第48章のこれまた有名な一節³⁶⁾を、「資本の歴史的使命」、「新たな社会の成立のための物質的諸条件の準備」、「自由の王国および必然の領域」という見出しをつけて引用していることに注目する。マルクスがそこで「……この必然の領域のかなたに、自己目的として値する人間的な力の発展、真の自由の王国は始まる」(訳文と傍点は河上のもの)とのべているところに河上は註記して「先きに引用した章句(つまり『資本論』第1部第15章末尾の章句)の中の言葉を用いれば、「各個人の自由なる・精神のおよび社会的の・活動のために獲得される部分の時間」が、すなはち此の『真の自由の王国』に属する」とかいているのであって、われわれはここに、河上が青年期のヒューマニズムをその後の精進のなかで長谷部文雄の所謂「階級的ヒューマニズム」へと深化しながらも、明治44年に『経済と人生』を刊行したときと基本的には同じ思想をいだきつづけているということ、を確認することができるであろう。

32) 同上、738ページ。

33) 同上、725ページ。

34) 同上、789ページ。

35) Marx, Engels, *Werke*, Bd. 23, 1964, S. 552.

36) Marx, Engels, *Werke*, Bd. 25, 1964, SS. 827-828.

37) 『資本論入門』793-794ページ。

第2は、これまた河上が経済学の研究をはじめた当初から保持していた問題意識である、経済を人間生活全体のなかにおいて見てゆこうとする姿勢が、本書の随処にうかがわれるということである。たとえば、第3篇第5章「労働過程と価値増殖過程」1「労働過程または使用価値の生産」において生産的消費と個人的消費の区別がのべられるが、その際河上は、「生産と消費との関係については、『政治経済学研究序説』のうちに詳述してある。ここにはその中から次の数節だけを引用しておく」として、生産と消費との間の「媒介運動」をかたっている³⁸⁾。あるいは第4篇第12章「分業およびマヌファクツール」第4「マヌファクツールの分業の特殊性」において、社会の全経済史は都市と田舎との「対立の運動のうちに総括される」というマルクスの叙述を説明するとき『ドイツ・イデオロギー』の、物質的労働と精神的労働との分割を都市と田舎との分離と関連させてのべている一節を引用し、同じ節のなかで「社会全体にわたる分業が計画的に行はれるようになるのは、共産主義社会の第1段階たる社会主義の時代において……また一切の固定的な分業が廃止されるのは、共産主義社会が完成されてから後のことである」として、やはり『ドイツ・イデオロギー』から、共産主義社会では人間は「気の向くままに……朝には狩し、午後には漁り、夕には家畜を飼(ふ)……ことが可能となる」という一節を引用している³⁹⁾。さらに第4篇第13章「機械および大工業」第6「補説」において、イギリスの工場法の教育条項に関連してマルクスが将来社会の教育をのべたところ(『資本論』第13章第9節)をとりあげ、秋田雨雀の「ソヴェートにおける青少年の工芸教育について」の一節を紹介し、また『資本論』の同じ節のなかで大工業が従来⁴⁰⁾の家族関係を崩壊せしめると同時に「家族関係および男女関係のヨリ高度の形態に対する新たな経済的基礎を創造する」と説かれているところに、読者の注意を喚起している⁴⁰⁾。この最後の点は本稿の前節で紹介した河上の婦人論を想起させるものがあるが、このように河上は、『ドイツ・イデオロ

38) 『資本論入門』509ページ。

39) 同上、665-668、673-674ページ。

40) 同上、765-768ページ。

ギー』や『経済学批判序説』や「ゴータ綱領批判」の叙述を活用しながら『資本論』では簡潔にふれられている問題をできるだけふくらませることによって、「『資本論』は、その内容を『普通の意味の経済原論』に局限していないという点に、一の特徴をもつ」⁴¹⁾ということをあきらかにしようとしているのであって、われわれはこの点にも河上独自の『資本論』の読み方を見いだすことができるであろう。

V

本稿は、1972年6月3日に京大経済学会と河上記念会との共同主催でひらかれた講演会での私の講演の原稿を補訂したものであるが、その講演の最後で私は、当日講演会場の京都府立総合資料館の別室で展示されていた河上の遺品の中に、京都大学経済学部所蔵にかかる河上肇文庫の貴重な諸資料の一部がはじめて公開されていることにふれ、こうした未公開のノートのたぐいをも含む本格的な河上肇全集が将来ぜひ刊行されるべきであると訴えた。河上は決して、二三の代表作をよめばその真髄を適確につかみ得るようなタイプの思想家ではない。新旧思想の対決と交流に全身全霊をかけ、徐々に、かつ「ある種の混濁」⁴²⁾をともしないながらではあるが、徹底した思想的脱皮をとげてゆくその過程にこそ河上の真面目があるとすれば、公刊された彼の著作のみならず、ノート、草稿、手紙などもまた、河上研究にとって不可欠の資料でなければならない。たとえば河上文庫から展示された三つのノート、すなわち河上が明治44年に沖縄

41) 同上、279ページ。

42) 内田義彦は河上の思想的遍歴の過程で「ある種の混濁」が生じていることについてつぎのようにのべている。「しかし、思想の混濁現象は積積現象ではない。思想の混濁は、一方でたしかに河上の理論的な消化力の弱さを物語っている。しかし同時に他面、かれが思想の肉体化への本能的な欲求を、鋭い現実感覚とあわせもっており、その意味でつねに新しい思想を、肉体化された古い思想と交流、対決させていたことが、こうした混濁をひきおこす原因となっていたという側面も、見逃すことができない」(内田『日本資本主義の思想像』昭和42年、158-159ページ)。河上の思想的特質についての適切な評言というべきであろう。ただ内田はその場合「思想の肉体化への要求は、河上において宗教的真理の追求という形となってあらわれる」(同上、189ページ)とのべているが、元来人生百般の問題に責任を感じる経世家的な性格をもっていた河上にとっては、魂の問題に徹底的に沈潜する宗教家としてではなく、人生いかに生きべきかを模索する究道者として、思想の肉体化を求めたとすべきであろう。

の漁村を調査したときの記録は彼の論文「琉球糸満の個人主義的家族」⁴³⁾の背景をしめすものとして、また大正7年ごろに書かれた「マルクス・ノート」は彼の個人雑誌『社会問題研究』の創刊直前のマルクスへのとりくみ方をしめすものとして、最後に大正15年度における経済学史の講義ノートは、河上が講義した最後の学史⁴⁴⁾の記録であり、『資本主義経済学の史的発展』(大正12年)以後のマルクス研究の深化がその学史にどのような変化を生み出したかをしめすものとして、それぞれに興味ふかい。別の機会にのべたように⁴⁵⁾、こうした未公刊資料をふくめた真の意味での全集の刊行は非常な難事であり、とくにわが国ではそうである。だが河上の場合、天野敬太郎の、鏝骨の労作『河上肇博士文献志』(日本評論社、昭和30年)⁴⁶⁾があり、また白石凡や内田丈夫らの努力で出た『河上肇著作集』(全12巻、筑摩書房、昭和39—40年)があるのだから、そうした過去の貴重な実績をふまえて本格的な全集を準備することは、決して不可能ではないであろう。もしこうした全集が完成された暁には、本稿でその一端をしめそうと試みた河上独特の経済思想のひろさと深さとは、はじめて十分にその全貌をあらわすことになるであろう。

43) この論文は『京都法学会雑誌』第6巻第9号(明治44年9月)に発表され『経済学研究』(大正元年)に収録された。なお河上のこの沖縄旅行とそれが現地の人々に及ぼした影響については、比嘉春潮『沖縄の歳月』中公新書、昭和44年、56-58、166-170ページ参照。

44) 河上のこの経済学史の講義については、つぎの二つの文章を参照。古林言楽「河上先生の最後の講義」『河上肇著作集月報』第8号、昭和40年1月、森戸太郎「河上先生と経済学説史」同月報、第11号、昭和40年4月。

45) 杉原「わが国における経済学関係の個人全集について」『経済資料研究』第5号、昭和47年5月。

46) この天野の労作については、杉原「『河上肇博士文献志』への一補遺」天野敬太郎教授古稀記念論文集『図書館学とその周辺』昭和46年、550-563ページを参照。